



# スピリチュアルケア 第 50 号

特定非営利活動法人 臨床パストラル教育研究センター

発行人：W. キップス 発行所：臨床パストラル教育研究センター  
〒158-0095 東京都世田谷区瀬田 1-28-2  
TEL 03-3700-3425 FAX 03-3700-3427  
e-mail: tokyo@pastoralcare.jp http://pastoralcare.jp

2011.1.20

年頭所感 2011

## 新年に信念 生きる目標

ウアルデマール・キップス

### 始めに

昨年7月、足立区で都内最高齢の111歳とされていた高齢者がミイラ化した遺体で見つかった事件を契機に、日本中に所在不明な百歳以上の人たちが多数いることが判明して、日本社会は「無縁社会」と名付けられた。更に年末、朝日新聞は“家族”ではなく「孤族の国」と名付けた記事を連載している。<sup>1</sup>ちなみに1998年以来毎日80人を超す自死者（年に30,000人以上）があり、自死予備軍を含めればその二倍の数となる。日本はいわば「自殺大国」であることは滅多に新聞の見出しに挙がらない。

### 周囲を見る目

最近、「この国で、10年以上の間、毎日80人を超す人々が自分の命を自分で絶ち、…少なくともありません。」という「センターの使命を果たすためのたすけを願う祈り」

の中で、自死を取り上げたことをセンター会員の一人に述べたとき、「わたしの周りにこうした人はいない」と言われたときのショックは大きかった。社会や周囲



の状況を見ていないのだろうか。臨床パストラルケアは入院している人々だけではなく、自分の周りの人々の心・霊・魂の叫びを聞き取ることである。私事だが、元旦の午前9時に電話が鳴った。「あー、今日も働いていますね。実は…」と、病気との闘いを聞かせてくれた。年賀状も人間同士のニーズを叫んでいる。“わたしには関係、それがほしい！”携帯電話の使い主の大部分も同様であろう。“関係がほしい。一人では寂しい。”わたしたちセンター会員の力をそこに活かせるチャンスがある。少なくとも道で出会う見知らぬ人への挨拶は、病室を訪ねたときの挨拶がほんものになるための手段の一つになり得る。

<sup>1</sup> インターネット [www2.ttcn.ne.jp/honkawa/1163.html](http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/1163.html)  
朝日新聞 12月26日～28日「孤族の国」の男 55歳、軽自動車での最期；家族に頼れる時代の終わり；失職、生きる力も消えた；39歳男性の餓死

## スピリチュアルなパワー

昨年末、川崎市の幸市民会館での市民エンパワーメント研修「“家族で”から”地域で”一皆で見守る・ともに支える一」において、臨床パストラルケアを紹介させてもらった。その目的は人間（社会）が生きる／活かせる場になるためである。そのためには生きる力の発見と把握が不可欠な条件であろう。

人間は脳を含めた身体だけではなく、心・霊・魂からなっている存在である。忠実さや誠実さ、人生の意味や目標、努力する動機、質素なライフスタイル、積極的に分かち合って共に生きること、などは心・霊・魂から生じてくるエネルギーなのである。こうしたスピリチュアルな事柄は、身体的な手段（例：飲食やイベント）で養ったり、薬物や手術で治したり、グレードアップしたりするようなものではない。

昨年のチリ鉱山事故。暗闇の中で69日間生きぬいた33人の作業員の「埃に誇り ドラマ」はこうした内面的なパワーを物語っている。8時間毎に睡眠、自由時間、仕事とした一日のスケジュールの中で、昼と夕方（12時と18時）の祈る時間は彼らにとって唯一の力になったという。人間のこうした厳しい状況を切り抜けて生き残る力は、考える能力や落ち着き、連帯意識、信仰や希望なのである。考える能力は知的、落ち着きは主に心理的であるが、連帯感、信仰や希望はスピリチュアルなパワーである。彼らは気持ちではなく生きる意志・使命によって生き残ったのであろう。

## スピリチュアルパワーの育成と充電

最初に強調したい。現代の日本社会を意識して臨床パストラルケアを追求する者は、自分の気持ちや人間関係の善し悪しに左右されず、自分の使命感を追及し続ける者であるはずだ。スピリチュアルケアを提供する使命感をもつ者は、自分自身のスピリチュアルな面を意識し明確にしながら、絶えず育成していくことは当然である。資格認定課程の研修で重要な課題は「人生の歩み」の作成と信頼できるグループでの分かち合いである。自分が生きてきた道を再認識することによって自分を活かせる内面的なパワーに気づき、スピリチュアルケアへの関心のきっかけおよび今後の人生の目標を形成することができるからである。病む方々を活かせる相手になる条件はだれかの真似ではなく、「本（物）者の自分」であること。ちなみにそれは「完璧な自分」を意味するのではない。

そのために次の実存的な自問自答は、毎年繰り返される新年ではなく「**新人**」による「**新年**」を形成するきっかけになり得てあろう。即ち

- ・わたしは\_\_\_\_\_（の）ために生きる
- ・わたしは\_\_\_\_\_（の）ために臨床パストラルケアを追求する
- ・わたしは\_\_\_\_\_（の）ために苦しむ
- ・わたしは\_\_\_\_\_（の）ために死ぬ。

この問いかけに答えるのは「お正月の楽

しい気分」ではなく、人生の（新）舵い  
 ば信念になり得る。使命、天職やライフ  
 ワークの確信にもなる。ちなみに、新年に生  
 と死の極限状態にいる重篤者にとって上  
 述の問いかけは「まさに今のテーマ」であ  
 ることを言い添える。（お正月に患者訪問  
 するような時にはこれを意識するとよい。）

以下はわたしが臨床パストラルケアを  
 意識するために答えたものである。

- ・人生を通して、わたしを相手にしてくれ  
 るイエス・キリストを知り、その方のた  
 めに生きたい
- ・人間の品位は脳を含む身体的な部分だけ  
 ではなく心・霊・魂のスピリチュアルな  
 パワーに因るので、そのパワーを活かす  
 ために臨床パストラルケアを追求し、そ  
 の必要性を社会に訴えたい
- ・苦しみたくないが、人間として成長し、  
 生きるために苦しむことは不可欠な要  
 因だと確信している。苦しみをコントロ  
 ールすることに賛成するが、コントロール  
 は薬物と手術だけに限られない。心・  
 霊・魂の苦しみをコントロールできる力  
 は偉大であり、スピリチュアルケアはこ  
 うしたパワーを活かす行為である。その  
 ためには苦しんでもよい。

わたしは“治す主”ではなく“癒し主”  
<sup>2</sup>であるイエス・キリストのために生き、  
 死にたい。なぜならわたしにとって癒し主  
 であるイエス・キリストは臨床パストラル  
 ケア、スピリチュアルケアの中心であり、  
 保証人であるからである。わたしは「Jesus  
 the Healer」に生きる力、目標を追求する  
 ための支えを願う者でもある。

### 最後に

病院における的確な臨床パストラルケ  
 アのメリットとして、アメリカのメリーラ  
 ンド大学メディカルセンターに掲示され  
 ている事柄を紹介しよう。<sup>3</sup>

「過去 50 年間の研究に因れば、人間の  
 健康と幸福感はスピリチュアル・ニーズが  
 適切に対応されることにより良くなって  
 くることが示されている。プラスになる事  
 柄の例は以下のような事である。」

- ・入院期間が短縮される。
- ・痛みがより良くコントロールされる。
- ・入院して良かったなと思うようになる。
- ・治療を完遂しようという意欲が増してくる。
- ・血圧や心拍数のような循環器系の問題が  
 よりよくコントロールされる。
- ・幸福感が増してくる。

<sup>2</sup> 病気を治しても必ずしも心は癒されない。逆に心が癒されたとき、病気であっても  
 生きられる（例：安心して死を迎える=受容）

<sup>3</sup> University of Maryland Medical Center [www.umm.edu/pastoral\\_care/](http://www.umm.edu/pastoral_care/)

## 本誌創刊号から第 50 号までの変遷

本誌編集委員長 吉田 彪

最近の本誌編集委員会で、今度の記念すべき第 50 号を発刊するにあたっては、創刊号以来の歴史を振り返る事も意義のある事ではないか、という話になった。そこで本部事務所に保管されている創刊号以来の各号の記事を読み取りながら、その変遷の概要を出来るだけ簡潔に纏めて見ることとした。ただ、30号以前のものについては、私は今まで全く目にした事がなかったので、創刊号以来その編集に携わってこられた木澤寛子氏(センター副理事長)にいろいろお尋ねして参考にさせて頂いた。

### 1) 創刊号(写真参照)

臨床パストラルケア教育研修センターは 1998 年 1 月 1 日に任意団体として発足した。発足当初から会員への各種お知らせをするという目的で「ニュースレター」を発刊しようという話が出ていた。実際にそれが実現されたのは、ここに示したようにセンター発足半年後のことであった。この時のトップページのデザインは姫路の印刷所が作ったものである。タイトルの中心にその後センターのロゴになるものが使われているが、

これは木澤寛子氏のデザインした図にキップス先生が「Jesus The Healer」の文字を加えたものである。トップ記事はセンター発足時の運営委員長、松本信愛氏がセンター発足の経緯を述べている。これ以降、本誌は季刊として 3 カ月ごとに発刊されている。



### 2) 第 2 号から第 29 号まで

第 2 号からはタイトルは臨床パストラルケア教育研修センターを大文字で中心におき、News Letter は右下に小文字で入れ、ロゴを左端に置いた。どういう記事を掲載するかについては、キップス先生がほぼ全て決めて、割り付けをシスター木澤が担当していた。事務所がシスター木澤と

ともに姫路、小金井、田園調布などへ移転する間、久留米の江口氏や小田原の田中洋子氏等が割り付けを担当したという。印刷も初期には姫路の印刷所で行っていたが、途中から印刷機を借用したり、購入したりして事務所でシスター木澤が印刷するようになった。記事の内容は毎号のようにキップス先生のスピリチュアルケアに関す

る記事や感想文が掲載されるほか、毎年の全国大会での特別講演や教育講演の内容を何号かに分けて掲載している。ちなみに、このような講演内容が掲載されているのは第31号までであり、他はシリーズ本「心と魂の叫びに答えて」の1-5に纏めて出版されている。そのほか、研修会の感想文、会員からの体験記などが取り上げられている。現在も続いている「スピリチュアルケアの的確な援助者の教室」は益尾悦子氏によって第29号に第一回が開始されている。勿論このような記事のほかに会員に対する「お知らせ(ニュース)」が毎号掲載されている。

### 3) 第30号から第50号まで

第30号から本誌が現在の「スピリチュアルケア」に改称された。その理由は本誌をセンター本部からの会員へのニュースの伝達という性格から、社会一般へのスピリチュアルケアの啓発・広報手段へと変えていこうとする意図からである。そこで、別に8年ほど前から各地域ブロックの会員に向けて発行されていた「ネットワーク」誌をもっぱら会員へのニュースの伝達に用いることになりつつある。本誌の発行所はこれまで久留米の事務所であったが、NPO法人として本部事務所を現在の東京都世田谷区瀬田に移すと共に、第39号から発行所を本部事務所とした。また同時に、本誌編集委員会を設立して、本誌の

内容の充実を図る事とした。従って、第40号の編集後記にも書いたように、記事内容が第39号くらいから従来と違ってきた。すなわち、スピリチュアルケアに関する主要記事としてキッペス先生の一文を掲載すると共に、毎号必ずセンター外部の方(1-2例外はあるが)に寄稿して頂く事とした。それから、「実践の場から」という欄をつくり、スピリチュアルケア現場で活躍されている会員の方々の寄稿を毎号お願いしている。「読者の声」欄として、興味深い書物の読後感や感想文、映画や絵画の鑑賞文などを掲載している。更に、「勉強室」としてスピリチュアルケアに関連した「ことば」の解説をキッペス先生をお願いしている。「スピリチュアルケアの的確な援助者の教室」では従来は一人の先生からのコメントだけ頂いていたが、無理を申しあげて毎回お二人の先生からコメントを頂戴するようにしている。

記念すべき第50号を発行するにあたり、極めて簡単に創刊号以来の歴史を振り返ってみた。第100号を発行する時(12-3年後)に振り返ってみて、第51号以降がまた一段と飛躍した「スピリチュアルケア」誌となっているように編集委員一同努力を続けたいと思っておりますので、皆様の多大なるご援助とご協力をお願い申し上げます。



## “ 林 邦治 理事 ありがとう、安らかに ”

センター理事 小原 義雄

故林理事帰天の訃報を、私は昨年暮れ12月の14日夜遅く、夕刻にガラシア病院で亡くなられたことを実弟の達郎氏から受けた。その時、“ あっ、そうだったのか、あれが私への最後の別れのあいさつだったのか ” という思いとともに熱いものが止めどなくこみ上げてきた。

私は、前日13日の昼過ぎに、入院しているガラシア病院のホスピス室に彼に会うために訪れた。病棟の看護師の案内で病室の近くまで行くと、病室から奥様が顔を出された。そして、“主人は、昨日からずっと意識がないのです。でも、どうぞお入り下さい”と、覚悟を決めたような様子で案内された。私は、そっとドアを開けて中に入った。部屋には彼の竹馬の友の友人がベッドの後ろに立っておられた。私はその友人に会釈し、ベッドのすぐ横に行き少し大きな声で、“林さん小原です”と声を掛けた。すると、瞬間、表情がピクッと動いたようであった。

そして、私はベッドの横に置いてあった椅子に座り、彼の右手をしっかりと握ると彼の手は少し腫れぼったい感じであったが温かった。私は、万感の思いを込めて、今、この時を共にさせていただこう。と念じながら彼の指と私の指を合わせて、“恵みあふれる聖マリア”と唱えながらロザリオの祈りを始めた。そして、彼が幼い頃歌ったであろう赤とんぼやふるさと等の唱歌を数曲歌った。続いて、アメージングレイスの旋律にのせて、出会いに感謝♪ いのちに感謝♪ 人生に感謝♪ のことばを幾度もおよそ30分位歌い続けていた。すると、林理事の目が少し開き目にうっすらと

涙が光り、徐々に目が開き意識が戻ったのです。それは本当に不思議な感動の時でした。そこに、シスターと看護師が入ってこられ、“林さんクリスマスをしましょう”と言われ、私も一緒に‘しずけき’等3曲歌わせていただいた。その時、彼は体でリズムをとっておられ様子が伝わってきた。

シスターが出て行かれた後、私の方に視線を向けて発せられた第一声は “うま・・・うま・・・” であった。最初はその意味が奥様もよく分からないでおられた。しかし、口元をよく観ると “うまい” と言っておられるのでした。なんと歌がうまいと言ってくれたのでした。

気がついてみたら1時間程経っていたので、今日はこれだと思っ立ち上がると、“あ・・・”と言われるので、奥様に “何か言っておられるのですが” と伝え、奥様が文字盤を持って、いろいろ尋ねられても、その時はよく分からなかったの

ですが、家に帰って食卓の椅子に座った時、「あ、そうだったのか、ありがとうと言ってくれていたのだ」とわかり、私は涙が溢れてきた。

いよいよ帰ろうとして、“林さん、また、”と言って顔を近づけ手を振ると、フトンの下からゆっくりと私を覗くかのように手をあげて、“さようなら”をされた。その姿に私は、故林理事がそれまで生きてこられた人生の生き様を見た思いだった。と言うのは、その時の彼には手で文字を指さす力さえ残っていなかったのです。ですから、彼は真に渾身の力を振り絞って、最後の“さようなら”をしてくれたのだと思います。



療養中の林邦治

故林理事は、幼い3歳の頃からカリエスを患い小学校も3年の時からずっと19歳まで長期入院生活を余儀なくされた。19歳の時にカトリックと出会い、遺された手記によると、『私は神と出会った。私の人生はこれから新しく始まる』との信念を体得されたことが記述されている。本当に、それからの人生はこの信念の如く揺るぎない確信を持って生き抜いて来られたと言える。

故林理事の奉仕の原理となる精神は、常に、苦しむ者や病める者の視点であった。

定年までガラシア病院の事務局長という重職を果たされたが、その後、不自由な体ながら、三重の松坂に[知的障害者]のための施設を創立され、その理事長として務めてこられた。その間、本センター主催1998年京都で開催第一回パストラルケア

ケア全国大会の中心となって活躍されたこと。センターの理事として創立時から運営に奉仕されたこと。また、驚くべきことには、定年後数回にわたる胃がんの手術で胃を全摘され、肝臓も半分は無き状態で、理事会だけでなく昨年6月の全国大会に至るまで一度も欠席されることはなかった。私はお伴させていただきながら、『林さんのこのような力はどこからくるのだろうか・きっと彼の信じる神から何か特別の使命を与えられているのではないかと、いつも不思議に思っていた。

林理事を失った今、彼の偉大さ、すごさをあらためてひしひしと感じている。彼が与えてくれた “ 生きる光、生きる力に、心からありがとうの感謝 ” とともに、彼の生き様は、私、いや臨床パストラルケア教育センターの貴重な宝であると思っています。

常に笑顔絶やさなかった “ 林 邦治さん ありがとう ! ”

## 新 A 会員のご紹介

この度、A 会員としてご入会されました埼玉県の「Michael Broadcast 合同会社」様をご紹介します。

「Michael Broadcast 合同会社」様はメディアの提供や福祉支援などを行っている会社で、当センターでもシリーズ(12回)で行われています「夜間講座」のDVDビデオを作成して頂きました。(写真)

臨床パストラル教育研究センター活動の趣旨に賛同していただけの個人、団体の方のご支援に感謝致します。

今後ともよろしくお願いいたします。

ありがとうございました。

Michael Broadcast(ミカエルブロードキャスト) 合同会社

<http://www.michaelbroadcast.net/>

※なお、DVDをご希望の方は、センター久留米事務所までお問い合わせください。

TEL 0942-31-4836

FAX 0942-31-4835



1巻(100分前後) 1,500円(税込)

## 希望の光が見えてきた —— 臨床パストラルケアワーカーの職場を求めて ——



NPO 法人臨床パストラル教育研究センター  
理事長 ウアルデマール・キッペス

1998年、当センターの設立前後の頃、各方面の方々とパストラルケアについて話し合っていたが、その中である病院の元院長が言われた言葉が鮮明に記憶に残っている。「日本の医療に臨床パストラルケアを導入するのは無理です」と確信をもって述べておられた。しかし私たちは臨床パストラルケア導入のために確信をもって今日まで歩いてきており、それなりの実績を残してきたものと自負している。

当センターの主な活動目標は教育研修による人材養成と資格認定者に適切な職場を確保する事にある。センターの発足以来教育研修活動は年々充実してきており、今までに延べ1,300名以上の研修生を教育し、80名前後の資格認定者を輩出してきた。しかしながら、これら資格認定者にしかるべき働き場所を獲得することは不十分なまま現在に至っている。以前から資格認定者の方々から、「働く場の獲得」のためにセンターはもっと積極的に活動して欲しいという願い(叫び)が発せられていた。

以下は最近そのような職場獲得の機会に恵まれた一つの例である。

昨年6月29日午前7:20分ごろのミサの後、一人の知り合いがわたしに「Aさん(私の40年来の知人だが最近数年は会っていない)を訪問してくださいませんか。重病です」と言われた。入院先のM病院のメモをもらい、朝食後病院へ向かった。その病院に行くのは初めてで、未知のわたしに面会が許されるのかと、車で送ってくれた同僚は心配していた。

病院の受付で名刺を渡しながら「Aさんに面会したいのです」と申し出ると、すぐ病棟を連れてくれた。病棟の係も受け入れ、病室に案内してくれたとき、Aさんは清拭中だったので外で待っていた。そのとき副院長が訪れ、未知のわたしに自然に話しかけてくれた。その場をなごやかにし、緊張がほぐれたのは患者であるAさん

のご主人と副院長の関係であった。ご主人は鹿児島の名門校の教員で、副院長はその教え子、わたしもまたその学校で教えたことがあったことである。

Aさんへの訪問では、ほとんど静けさとアイコンタクトであった。Aさんはわたしと同様な信仰をもっていたので「祈っていいですか」と尋ねてみた。まっすぐ寝ているAさんが「はい」と答えたので、「何のために祈っていいでしょうか」と聞くと「皆が幸せいっぱいになるように」というAさんの自然発生的な応答があった。わたしは驚いた。苦しんで死に臨んでいながら他者の幸せいっぴいを願えるとは!

ご主人にAさんのことばを電話で伝えた。2~3週間後、ご主人にまた電話を掛けると「Aは天国に行きました」と。その後、ご主人にM病院の院長に臨床パストラルケアのことで面会の依頼をお願いするとすぐOKの返事が貰えた。その後ドイツ研修旅行のこともあって私が多忙だったので、面会ができたのは10月になってからだ。11月には連携病院の3人と話し合った結果、12月1日から当センター資格認定者の一人がM病院で常勤として働けることになった。役目は「臨床カウンセラー」。更に今月は連携病院主催による看護師向けの「スピリチュアルケア」の研修会が予定されている。

このような例に関して一般的に注意しておきたいことがある。それは患者訪問の機会を、スピリチュアルケアの有益さと大切さを証明(センターの宣伝)するために利用してはならないという事である。でなければ患者さんの人間としての尊厳に背くことになり、そのような患者訪問はスピリチュアルな行為では無くなるからである。一方では、スピリチュアルケアの有益さを病院側にできるだけアピールする努力も必要である。今年は資格認定者のために仕事の場を発掘し、その働きを少しでも社会に知られるように活動できることを希望してやまない。



臨床パストラル・ボランティア 岩間 由紀子

私は月に1度、カトリック中央協議会で相談員として働いています。

カトリック中央協議会は、日本の宗教法人法に定められた宗教法人組織で、日本のカトリックの総本山です。全国のカトリックの方針を決めて、運営しているところです。

4年前、中央協議会の職員で、臨床パストラル教育研究センターでスピリチュアルケアについて学ばれた方から、「中央協議会で今、快適職場づくり、心の病予防のために外部から相談員を雇う計画が持ち上がっているのです、誰か来てくれる人は居ないだろうか」と尋ねられました。それで、センターから資格認定されていた私が、距離的に比較的近い所に住んでいることもあって、働くことになったのです。

面接を受け、契約書（謝礼金、交通費、任期・・・1年等）を取り交わして、毎月1回3時間、相談室として設けられた部屋で相談を受けることになりました。私の他に産業カウンセラーが来る週もあります。産業カウンセラーは、月2回（1回5時間）働いています。

職員のほとんどがカトリック信者、聖職者のこの職場で、いったいどんな問題があるのだろう、職場で働く方の悩み、苦しみはいったい何だろうと思いつつ、この仕事を始めました。

それまで、私が訪問してスピリチュアルケアをさせていただいたのは、病院に入院されている方や、老人ホームに入居されている方達ばかりでしたから、産業カウンセラーが派遣されている中央協議会のような職場は初めてだったのです。

産業カウンセラーは、さまざまな職場に派遣されていますから、職場で働いている方達の悩み、問題点を聴く機会も多いでしょう。そんな中で、私が相談員として務まるだろうか、スピリチュアルケアが出来るだろうか心配でした。

でも、相談室に来られる方達は、みな、肉体的には元気でも、心は疲れ果てていて、休ませてもらいたい、話を聴いてもらいたいと思っていることに気がつきました。私はその方達の話をもっと聴いて、疲れた心が少しでも癒されればと思うようになりました。「職場の人間関係」や、「家族、家庭の悩み」「自身の病気と仕事の関係」などを聴かせて頂いています。

また、私がカトリック信者だから、話を聞いてもらいたいと来られる方もあります。信仰に関する悩みは、信者同士でないと思われてしまうようです。そんな時、私自身の体験をお話して、共に考え、時には、共に祈ることもあります。ある方が「相談室は、学校で子供がお腹の痛い時、保健室に行くように、そんな気持ちで来ていいのですか？」と尋ねられました。「そうですよ。気楽な気持ちでいらしてください」と私は答えました。

ここで働いてみて、スピリチュアルケアを必要としているのは、病気の人や老人ホームに入居している方ばかりではない。普通の職場で働いている方達の中にも、悩みを抱え、助けを求めて日々過ごしている方がおられるということが分かりました。月1度ですが、この職場の方々への相談員として、働き続けたいと思っています

# スピリチュアルケアの的確な援助者の教室 第19回

## 訪問記録の実例

会話記録(G:ゲスト、H:ホスト)



『Gの紹介:60代女性。癌の末期と診断、積極的治療は出来ずホスピス入院。医者より、余命数週間と言われている。本人も病気については告知を受けている』

—託せるようになった—

- H1:「おはようございます、〇〇さん。」
- G1:「おはようございます。…ひさしぶりですね」
- H2:「ええ、久しぶりですね。昨日は、休みでしたし、その前は〇〇さんの痛みが強かったの、遠慮していました」
- G2:「それは、ありがとうございます。痛みは取れているんですけど、…わたしね、幻覚で苦しんでいたんです。」
- H3:「幻覚？」
- G3:「ええ、女性が痛がって苦しんでいる姿が見えるんです。それを、おじちゃんについて回って歩いているのが見えたんです。痛かった時の、私が ああだったのかなって思ったりね…でも、それが幻覚だとわかったの、安心しました。」
- H4:「良かったですね、分かって」
- G4:「ええ、前の病院でも、幻覚で苦しんだんですよ…沢山の幻覚を見ました。いろいろな人がいますからね、私もその中の一人かも知れませんが…(間)でもね、優しい看護師さんたちがいてくれて、助かりましたし、安心も出来るようになって…でもね、ここに來れたのが、本当に安心なんです。」
- H5:「ここが、安心なのは、どうして？」
- G5:「ここではね、癒される感じがするんです。」
- H6:「どういうところが、癒される感じになるの？」
- G6:「そうね…周りの人達、従兄妹や兄弟たちが優しくしてくれてね、だから心から感謝が出来る、感じる事が出来るの。」
- H7:「…そう、感謝出来ると感じる。(間)…
- 感謝できる気持ちになれるのが、〇〇さんにとって癒されるということの中で、大きいのでしょうか？」
- G7:「ええ、ほんと、そうです。周りの人がいろいろな事をしてくれて。こんなに、してもらっていいのかしらと思うくらい…(間)感謝できるって嬉しい…」
- H8:「そうですね、嬉しいね…(間)。感謝出来るくらい周りの人達がいるのは、幸せですね」
- G8:「そうなんです…。私ね、前はこうじゃなかったんですよ。負けず嫌いでね、負けるのが嫌いだったんです」
- H9:「そう。…誰に、負けるのが？」
- G9:「誰でも…とにかく周りの人には負けたくなかったの。なんでも、そうだったの。何をするにしても人には負けたくなかった。だから、なんでも頑張ったわ…。でもね、それが、変わったの…。」
- H10:「そう、変わったんだ…。(間)どうしてでしょう…病気になることで、変わったの？」
- G10:「そうなの…。この病気、癌になって、初めて、別に競争とかしなくてもいいんだって思えるようになったの。そのままの自分でもいいんだって思えるようになった。」
- H11:「そのままの自分でも良いつて思えるようになった…(間)…
- 競争して勝たなければいけないと思う自分から、解放されたのでしょうか？」
- G11:「そう、そうなの解放！…<嬉しそうに

>。解放されたんだと思います。いつも、いつも誰かに負けたくない、勝たなければいけないって思う自分から、別に勝たなくても構わないんだと思えるようになったの。そしたら、とても楽になって…。それで、兄弟や子供達にも、こんな自分でも、なにもしない自分でも受け止めてくれるのが解ったのね、…それが嬉しかった。」

H12:「(アイコンタクト)…こんな自分でもいいと思える、嬉しいね。…良かったね、周りにそのままの自分でいいと言ってくれる人が居るのも」

G12:「ほんと、そう…だから嬉しくて…(涙)…ここで、周りの人達の優しいところに包まれて過ごせるのが嬉しい…」

H13:「ほんとですね、嬉しいね」

G13:「ええ…(涙)…だから、周りに託していけるようになったのね。今まではそうでもなかったのに、やっとここまで来て、託せるようになった…。ここまで来るのには、大変だったのよ。」

H14:「うん。…大変な中でも頑張ってきたので、託せるようになった」

G14:「そうなの。これまでの人生、いい事が多かったようには思えるけど、でもね…(間)…私ね、貴方に話したかしら、離婚したのを…。」

H15:「いいえ、聞いていませんでした…離婚しました？」

G15:「わたし、〇〇に離婚したんですよ。その時には、大変だった…。妹も大変だったの、それで鬱になって、精神科に通い薬も結構のんでいたの。でも、なかなか良くなくて…それでも何とか薬があって。今は落ち着けるところまで来る事が出来たの。それでほっとして安心。それに、娘が、障がい者のグループホームに入れるようになったのよ…、そのホームでも自分の好きなクッキーが焼けるし、仕事も出来るようなので、安心。でも、そこまで来るのが大変だった…ほんと辛かった…(間)…。」

H16:「…(沈黙)…辛いのに、よく頑張りましたね」

G16:「ほんと、そう思います。よーく、私は頑張っただけだなあーって思います。」

H17:「ほんとです…、よく頑張りましたね」

G17:「ええ、…だから、私、ここで、自分のこと、誉めてあげようと思うんです。」

H18:「そう。自分で褒めてあげる…」

G18:「ええ…<嬉しそう>」

H19:「…自分で自分のことをしっかりと誉められるんですね。うーんと誉めてくださいね。」

G19:「ええ、そうします」

H20:「〇〇さんの話を聴いていて、素敵だなって…私嬉しくなります。」

G20:「私も嬉しい…。本当にありがとうございます。」

H21:「こちらこそ、ありがとうございました」

## ▼訪問記録に対する▼

### ～～キッペス 先生からのコメント ～～

このスピリチュアルケアの訪問の際、まず G が今、人生の極限状況にあることを念頭に入れることが重要である。即ち、G の自分自身に対する考え方 (イメージ) が肯定的なのか否定的なのか。自己のイメージがどうであるのか、それが自分を受容している／しようとしているかどうかを確

認することである。特に大切なのは G 自身が把握したこと、いわば独学で得た事柄をキャッチし、それをフィードバックすることによってそれらをより明確にし、G に意識させるのは、G の最期へのエンパワメントになる。逝くときは G 自身一人だからである。

G の言葉の中でスピリチュアルな課題として捉えられるのは、安心 (G3、G4、G15)、癒される感じ (G5)、感謝 (G6)、負けず嫌い (G8)、そのままの自分でよい (G11)、託せること (G13)、自分を褒める (G17) などである。

H が G を尊重している態度 (H2) が G との信頼関係を形成し、G が自分のこと (幻覚～離婚まで) を話せる環境を整えた。H は G が自分の体験から得た知識 (独学) を反復によって強め、さらに明確にしたことは高く評価される。

幻覚症状は精神科医の領域なので、その中には入らない方がよい。H は G がその幻覚体験によって得たことを、H4 「わかって」はいいが、H5 「安心、どうして」と尋ねるのは幻覚の話の中に入る危険がある。H は「安心」だけで終わるとよい。今回の場合、G が「癒される感じ」と「周りの人、身内の人がいるので感謝できる」ことを明確にできたのは (H7) のおかげである。

H10 は、G の負けず嫌いなのが“何によって (病気によって) 変わった”か、を明

確にさせることが出来て効果的であった。さらに「病気にプラス面もあるのです」と言い加えるとよい。H11 では、G の「そのままの自分でよい」という発見を反復し、それに「病気による解放」を提供したこともよい。

G11 に対して H12 は、「G は「負けず嫌いの自分」に勝ったのですね」と加えると G はもっと自己肯定ができたのではないか。“負けず嫌い”はマイナス面が強いが、“自分に勝った”はプラス面として捉えることができるからである。

H20 「〇〇さんの話を聴いていて、素敵だなんて・・嬉しくなります」は感情レベルに近いものであるので、「〇〇さんは生き生きしている方で、自分のことをよく把握し力強い方です」と別れのあいさつにするなら G をもっと強めたのではないか。

この訪問では、全体として H の関わり方が、末期がんで余命数週間と告知を受けている G のエンパワーメントになったと言える。

## ～～ 盛 先生からのコメント ～～

訪問記録の検討は言葉のキャッチ・ボールの検討ではないのでまず、この記録全体については 基本的訪問記録の記入の仕方をもう一度学んで欲しい。G との本物の出会いになるにはやはり五感を用いてその存在を受け取るためには言葉だけでなく訪問記録の中に H が気付いた G の表情の変化、声のトーンなどを記入することの努力が必要であろう。言語以上に態度などはその人の内的な部分を表現していることを忘れてはならない。

入室時にはまず、感じた点はなかったであろうか？ 部屋の明るさは、においては、

空調は等など、まず自分の受け止めたことを書いたほうがいいだろう。H2 自分が訪問しなかった理由を素直に言えたことはいいことである。H3 「幻覚？」という言葉が発した時、H の心の動きはどうかであったのだろうか 何も記入されていない。G2 の「・・・幻覚で苦しんでいたんです。」に対して、例えば「幻覚ですか・・・？」と言葉のトーンを変えてみることはどうであろうか。H4 も「良かったですね、分かって」も少し相手の言葉をリピートしながら 例えば「そうですか・・・幻覚だとわかって、安心したので

すね・・・」と言うのはどうだろうか。G4でGはいろいろな思いを話されているのに、H5で「ここが、安心なのは、どうして？」と尋ねるのは如何なものだろうか。G4でHがGの「間」に気付いたこと、とても大切なことである、そしてそれを訪問記録に記入したことはとても評価すべきことである。まさしくGの「間」における変化、それをどのように受けとめていけるかがHのスピリチュアルケアの大切な部分である。H5のストレートな質問、Hの個性であるかもしれないが他の言い方も出来ることも考えて欲しい。Gの気持ちに寄り添うにはこのような言葉で質問するだけでは足りない。G5でGは一つのキーワードを発している「癒される感じ」これをHはどのように受けとめたであろうか？ Gの発したキーワードに対するHのセンス、これこそがケアの中心部になる。H6の「どういうところが、癒される感じになるの？」ここで、このように問うことは悪いことではないが 情報収集してからHは何を求めているのであろうか。もう少し熟考して欲しい。H7の「・・・そう、感謝出来ると感じる。(間)」この部分は良かったと思う。後半の自分なりにまとめて尋ねたことは良かった。Gは「感謝」というスピリチュアルなキーワードを発している。そこからHはどう向き合っていこうとしたのか、ここもケアの大切な部分である。H8「そうですね、嬉しいね・・・(間)。感謝出来るくらい周りの人達がいるのは、幸せですね」いい表現である。H9「そう・・・誰に、負けるのが？」ここで、またまたクローズド・クエスチョン(回答範囲を限定した質問)をしてしまっている。この会話の中でこのような質問の仕方ではよかろうか。答えはいろいろあると思うがHはここでもう一度、自分の言葉をよく吟味したほうがよ

かろう。G9の「・・・それが、変わったの・・・。」Gはここでまだ大切なキーワードを発している。人が変化すること、変わることに、それはスピリチュアルな体験である。それをGは気づいた。その気づきに同伴するためにはどうしたらいいだろうか？ここに答えのない、Hのその人なりが浮かび上がってくる。それがスピリチュアルなセンスである。H11で「解放」というスピリチュアルな言葉を提示している。いい言葉であるし、Gはそれに反応しているので、HはGに寄り添っているのではなかろうか。H12アイコンタクトを持って会話していることは良かった。Gが涙を流すことが出来たことは良かった。涙にはいろいろな意味が込められている、このような状況の中でHは自分の感情の変化にも気付きながらGの思いをしっかりと受けとめてください。その後の会話はしっかりGと寄り添っている。G14で「・・・離婚・・・」という言葉がGが使っている、ここでどうしてGがその言葉を言ったとHは思ったのだろうか？ここも重要なところである。Hの言葉は何を言おうとしているのだろうか、しっかりと受けとめて寄り添うことの大切な場面である。G14はここでクローズド・クエスチョンをしているが、これに対してH15「いいえ、聞いていませんでした・・・離婚しました？」と答えることもできるが、「そうだったんですか・・・」と心の声に聴くことも大事ではないだろうか。その後、G15でGは自分の過去を振り返って、辛い体験、胸の中を話している。それに対してのH16の受けとめは良いと思う。その後の展開は会話としては問題ないが、やはりその時こそ、Gの言葉だけでなく、非言語的なものもしっかり観察してト書きに記入して欲しい。

# 学び

## スピリチュアルケアの勉強室 9

### スピリチュアルな闘い

ウアルデマール・キッペス

スピリチュアルケアは楽しい団欒の語り合いでもなく、単純な傾聴でもない。スピリチュアルケアの対象は「生きること」にあるからである。生きるとはスムーズな人生を歩んで行くというよりは、むしろ厳しい試練や苦しい体験を伴っていることが多いのである。

「年頭所感」の中で取り上げた次の4つのテーマへの自問自答について考えてみよう。

- ・わたしは (の) ために生きる
- ・わたしは (の) ために臨床パストラルケアを追求する
- ・わたしは (の) ために苦しむ
- ・わたしは (の) ために死ぬ

これらの問いに、簡単にしかもすぐに回答できる／する人は少ないのではないだろうか。なぜなら生きる目標、いわば使命、天命、天職は生まれつきのものではなく、ほとんどは生きていく間に明確化する。ある使命感をある時瞬間的に悟ったとしても、その悟りは人生を通してのさまざまな体験によって明確になるのが普通であろう。すなわち、瞬間的な悟りではなく、日々の生活体験を通して自分の使命感を徐々に発見し、苦心して作り上げていくのが一般的ではないだろうか。瞬間的な使命感も、人生を通して得た生きる目標も、そこで授けられ、得たものを追求しなければ失ってしまう。人生の目標を手にするのが難しければなお、こうして得た信念や目標・使命感は人生を通して追求していく闘いである。生きる使命から自分を離そうとするパワー・影響力(=誘惑)は多い。その誘惑との闘いに勝つことも負けることもあり、人生はそのような勝ち負けによる希望と失望、平穏と不安、心がはずむときと落ち込むときの連続である。

この点からすると、ある中年の女性の次のような言葉は興味深い。「年齢を重ね、この

世の終着点が私の意識の中に入ってくるようになって初めて、私は真に生きるという意欲が湧いてきました。どの若い時代を振り返っても、日々はそれなりに過ぎましたが、強烈に命を意識することはありませんでした。いただいた命を十分に使って、やがてそれを命の源にお返しするという感覚をいただいてからは、日々命を精一杯使わせていただいているという思いです。今の時点のこの私の感慨が、これからどう変化していくのか、いかないか分かりませんが、どうあれ、どれもわが人生の初体験です。」

スピリチュアルな闘いは、生きる目標が解らないとき、悟った目標を追求したくない、あるいはできないとき、得た目標(理想)を自分のせいで失ったときなどに起こる。教育や社会習慣、伝統などに影響を受けつつ形成された良心に反するのではなく、自分が確信する道徳観に反する(あるいは、背いた)ときの悔いに囚われること、確信に背きギブアップ(どうせだめ、また同様な行為を行うだろう)しがちな姿勢に対して面と向き合っていくことなどはスピリチュアルな闘いなのである。

ちなみにスピリチュアルな闘いの自己体験と反省は、スピリチュアルな闘いにいる人の相談相手になり得ることを忘れてはならない。更に言いたいことは、スピリチュアルな闘いが心理的なものではないことである。心理は闘いの方法に役立つことがあるが、生きる意味や目的、信念、使命、天命、天職、確信、良心を形成するものではない。昨年チリ鉱山炭坑事件で解放された二人の20代の作業員の発言が印象に残っている。一人は地下で「もう心理学者のお世話にはなりたくない」と母に漏らしていた。もう一人は親類への手紙で、「これ以上、どんな気持ちかと聞かないで」と、心理学者への不満を語った。



## 読者の声

### 『プレシャス』を読んで

田口 桂子

1987年、ニューヨーク・ハーレム。16歳の少女プレシャスは、実父と義理の父のレイプによって2度も妊娠をさせられ、母親メアリーからは精神的にも肉体的にも虐待を受けていました。12歳の時に産んだ子供は、近所に住む祖母に預けられていました。「プレシャス(precious)＝貴い」という名前とは裏腹に、悲惨な家庭環境に生きていました。

プレシャスは、日常の読み書きがほとんど出来ません。学校に行きたかったのですが、父親が行方をくらましてから、自暴自棄で怠惰な母親の代わりに、家事全般を強いられていました。しかし、彼女はおしゃれをして恋をして、歌手や女優になることを夢見る少女でした。妄想の中で歌ったり踊ったりしている時が、過酷な現実を少しでも忘れられるひと時でした。

ある日、代替学校を訪ねてみました。ここでは、移民、ドラッグ、貧困など、同じような境遇にある少女たちが一緒に机を並べていました。特に女性教師レインとの出会いは、プレシャスの人生にとって大きな転機となりました。読み書きを学び、自らの人生について書くことによって、自己に目覚めて行きました。レイン先生の存在は「希望」でした。私はプレシャスが、自分の人生をあきらめずに、自らの道を自ら決めて進もうと、たくましく成長していく姿にとっても感動しました。

1980年代のアメリカは、経済格差が拡大していく最中にありました。特に黒人コミュニティに与えたショックは大きかったようです。貧困の中で疎外された男性たちは、家庭内にそのはけ口を求めた為に、DVや性的虐待などの暴力が蔓延していききました。当時は、そうしたコミュニティ

内部の暴力に言及することは、タブー視されていました。この本は、そういった背景のもとに書かれたものです。

本の内容に戻りますが、私が特に興味を持ったのが、人種差別が生んだ格差社会の中で生きているプレシャスの母親メアリーです。「お前はただ食事を作ったりやいんだよ。」と罵倒し、生活保護でのうとうと暮らし、「学校なんか行かず、外出は役所に行くだけにしろ！」と指図するこの母親も、きつとまともな教育を受けて育っていないことは、想像に難くありません。

チャンスの国アメリカで、そのチャンスの糸口も見えないほど、辛く貧しい境遇の背景には、私たち日本人の想像をはるかに超えた、有色人種への差別があったのだと思いました。

プレシャスにとって、学校に行きたいと自ら代替学校の門を叩いた瞬間から、彼女の運命は大きく変わり始めました。レイン先生との出会い、字を読み書き出来る様になった事、これらが彼女に希望をもたらしました。しかしそれ以上に、私は彼女が絶望の淵から這い上がり、再び未来に向かって歩み、自分の将来のために行動を起こした事が、プレシャス自身を大きく成長させたように思いました。現実を見つめ、自分の決めた人生を歩む決意をし、二人の子供を守るために、頑張って生きていくプレシャスに感動しました。

出典：河出文庫「プレシャス」

P.S. この本は実話を元にして書かれ、映画『プレシャス』の題材にもなりました。また、アカデミー賞の主要6部門にもノミネートされるなど、数々の賞を受賞しました。

# 3日・5日間 研修会感想

## 熊本 イエズスの聖心病院

2010年10月17日～21日

<科目Ⅶ>:神学的・宗教的人間論

- ・ 訪問記録には研修生それぞれ、G（ゲスト）との接し方に個性が出ていたように思う。入院患者3人のGとお話できた事、そして分ち合えた事は、今後学習を進めていく上で、記念すべきスタートが切れたと感謝しています。
- ・ 研修前に訪問記録を読んで、準備をして臨んでいた筈なのに、いざ目の前の初めてお会いするGと向き合った時、緊張して堅くなっていたのか、迷いが生じ、冷静で無い自分がいた。Gとの会話を記憶し記録するという事が、物凄いプレッシャーになっていたようです。
- ・ 1回目の検討会でつくづく、ゆったりとした気持で向き合わない、Gの話に添ってゆけないと痛感させられ、2回目訪問の時は、同じ人ということも手伝ってリラックスできたと思う。
- ・ 私以外の研修生は、それぞれ違った個性を持ち、訪問の仕方、話の進め方、スタイルが違っていたように思う。私は、目の前のGと向き合い、ひたすら分かち合いたいと念じて臨んだ。
- ・ Gの話される経験、言葉に、尊敬の念を持って会話させてもらうことで、急速に2人の間柄が身近になり、親近感が持てるようになった。初めてお会いしてお話させて頂いている筈なのに、



まるで旧知の仲のような感じで接する事ができた。ただただGに感謝 神に感謝。

- ・ 最終日午後4時30分研修を終えて、病院を後にする前の40分余りでしたが、お相手して下さった3人のGのところにお別れの挨拶に回った。どの方も、喜んで私を受け入れて下さっていたことがGの言葉・笑顔から窺えた。75歳のGからは、頑張ってくださいね、私も楽しかったわ。ありがとうとしっかり握手。93歳のしっかりばあちゃんからは、困った事があったらいつでも遠慮せず私に連絡してくるのよと携帯電話の番号を教えられた。もう1人86歳のGとは、訪問では、20分くらいしかお話ししていなかったが、お会いした当初とは、打って変わった満面の笑顔で見送って下さった。
- ・ きつーい、苦しい研修でしたが、受講させていただき本当に良かった。充実感のようなものに満たされて、感謝しながら聖心病院を後にしました。
- ・ 今私の魂は、これを契機に自分を磨き、一歩ずつ前進する事を熱望しているのだと感じています。 (B. T.)



## 鎌倉 聖テレジア病院

2010年11月1日～5日

### <科目Ⅳ>:スピリチュアルな痛み

研修科目はスピリチュアルな痛みでした。まず自分のスピリチュアルな痛みは、スピリチュアルに生きたいと願いながら、そのように生きられない自分に、痛みを覚えています。忙しいという字は心を亡くすと書くのだと聞かされてから、日々、忙しいと思わないように過ごしていながら、やっぱり、忙しがっている自分を見出しています。研修会では、まず、自分とゆっくり向き合うことをしたいと思って参加しました。

ゲストさんの訪問はもちろんですが、時間を自分のためにだけ使える贅沢な時（私には贅沢です）、自分と向き合おうと思えました。そして、こんな私を肯定してくださるイエス・キリストともっと親しく交わり、自分でも、自分を肯定し、出会えるすべこの方に、尊敬の念をもって接することができること、を目的にしました。この願いは80%研修期間中は達成できたように思います。

訪問では、回復期リハビリテーション病棟ということで、私の連れ合いが42歳の時に脳出血で倒れ、左方まひがあり、そのような状態で生かされています。そのことで、どうしても、経験を話したくなってしまう、の問題は感じました。でも、皆さん、今の時期を、頑張っている、その中に意味を見つけようとしていらっしゃるご様子に、感動をもって一緒に時間を過ごさせていただきました。訪問記録に対しては、的確な助言と、分かち合いを感

謝しています。

宿泊を本郷台キリスト教会でさせていただき、一緒に泊めていただいた方々との分かち合いができたことも本当に感謝なことでした。

(U. S.)

~~~~~

今回は研修も6回目になり、最初の頃と比べるゲストとの会話が自分でも変わってきたな、と思うところがある。以前はゲストの話を聴いて、自分が「うわあ、それってすごく大変だよなあ」と思ったら、そのまま「エ〜ッ！それは大変でしたね！」と返していた。しかし、今回は、「エ〜ッ！その時あなたはどう感じたのですか？」という質問が出るようになった。いわゆる、Yes/No を答えさせるのではない質問ができるようになった。

なぜそれができるようになったのかな、と考えてみた。頭で考えてそうして

いる(Do)というより、自分のあり方(Be)がごく自然にそういう行動を生んでいるのだとを感じる。つまり、自分は相手の人生に興味がある、という自分のあり方がそうさせているようだ。

どういうことかという、まず、相手は自分と全く違う思考回路を持っていて、全く違う世界を見ているというのが最近実感としてわかってきた。(このことを知らないで争いのタネになるが、知っている则会話のタネになる) そう思って相手と話すとき、その人が見ている世界を自分も見



みたい、という興味、好奇心がわいてくる。そして自然に「教えて欲しい」という質問が出てくる。これは相手を詮索するのではなく、相手に相手の世界を案内してもらう、という感じだ。その世界では相手がホストで自分がゲストになる。そして、そのほう

が相手は生き生きとしてくるし、その後の会話が広がる。

自分はそのような出会いや学びをとっても嬉しいと感じる。今回の研修ではそれを体験できてとても良かった。

(H. T.)

## 東京 聖母病院

2010年11月23日～27日

### <科目VI>: 哲学的人間論

人間は『聴く存在』として創られた。『創った者の意図を聴く存在』なのです。まず、私が生きているということ自体、愛されているということと同じだということ。私は無条件に愛されている…そこに立脚してこそ、本当に「聴く」ことができると教わりました。人間は、生きて、命に参加していることこそ人間の意義として最も価値あることと教わりました。

傾聴は単に技術ではなく、まず自分の存在を尊ぶことに始まります。「私は無条件に愛されている」と信じられるようになるまで、私は半世紀を要しました。しかし今、信じるに値する自分をもって患者さんを訪問できます。不安や怖れを持つ習慣がないと気づきました。ただ、ありのままです。それだけです。それより他に何もないと思います。だからこそ、「ありのままの私」をいかに知り、育てるかが、日常生活で大事になります。

研修科目 I 並びに夜間入門講座で講師の先生がおっしゃった「自分の体験に精通

する」とは、どのように自分の体験に精通する道のを辿られるのか知りたいと願っておりました。今回の研修会で、それが分かりました。

多面的な自分（自分で気づいていない、たくさんの自己像）を知ることによって、ダイヤモンドの原石がカットを多くしていくに連れて輝きを増すように、人間も輝くようになるそうです。では、どのように客観的に自分を見直すか、それは経験して自分で探すしかないのだろうと思いました。

日常の「小さな違和感」「小さな揺らぎ」「小さな気づき」を丁寧に扱って、それを感じる自分と正直に直面していくことの積み重ねしかないのだと思います。私は今回の研修会が7回目で、あとラスト1回を残すばかりとなりました。見ず知らずの私を病床で相手にして頂くことのかたじけなさ、と、「こんな自分で良いのか、何をやっているんだ！」という難しさに夜毎枕を濡らすこともありましたが、今思えば全ての出逢いから学ぶことがあり、私は



それらを大事にして今に至っていると言えます。昨夜、とある場で全国からお集まりの方々小さなグループになって「気づき」の分かち合いをすることになり、そのグループリーダーをさせて頂きました。終わってから、初対面のメンバーに、「あなたは素晴らしいリーダーでした。発言に返して下さる言葉が素晴らしくて、『発言して良かった!』と喜びが倍増しました」

と褒めて頂きました。臨床パストラル教育研究センターでの学びが、外部でも活かされ、評価されることを実感しました。私は、研修会を通して、自分の幸せをひとつずつかみしめ、自分に出会い続け、しかも怖れず楽しみに自分に伴走して育てていると感じます。これを生涯続けていくことになるでしょう。このセンターの学びに出逢えた奇跡に感謝します。(T.K.)

## 熊本 イエズスの聖心病院

2010年12月6日～10日

### <科目>:フリー

私は今回の研修で“知る”ということについて考えさせられた。名前、年齢、職業、趣味、健康、信念、宗教・・・様々なことを通して相手を知る、また知ろうとする。それは自分自身を知るにおいても同様である。では何を知ること、相手のまた自分の核心にふれられるのか。それを知るための手段は何か、どれだけの時間が必要なのか。自分自身どう在れば良いのか。研修中同じゲストを4日間続けて訪問させて頂いた。その間ゲストは同室者とこのような会話をしたようだ。

「あんた普段あんまり話さんのに最近よく話しとるねえ、誰が訪ねて来とるん？」

「知らん」(ゲスト) 私はこのやり取りをゲストから教えてもらい嬉しくなった。話さない人が話したというだけではなく、知らない相手(ホスト)に対して話すことができていることに感動した。



ゲストには親兄弟、子供がいない。人に裏切られた経験も多い。その方が私を兄弟のように感じると言って下さった。なぜと問うと、「すう～と本心が出せる」と答えて下さった。

短い時間ではあったがゲストの本心を聴かせて頂くことでほんとうのゲストを知ることができた。ゲストにもほんとうの私を知ってもらった。けれど実際にはお互いの細かいことは知らない。知る必要を感じなかった。4日目ゲストと“忘れない”と伝えあった。忘れないでいたい何かをお互いが受け取り合ったのだと思う。“知る”ということとは相手の情報を得ることではなく、相手の存在そのものを受け取ること、受け取ったものがあるということではないか。

(I. M.)

## 第14回臨床パストラル教育研究センター 全国大会のおしらせ

日 程：2011年6月18日(土)～19日(日)

会 場：日本教育会館(〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2)

大会テーマ：臨床におけるスピリチュアルケア ～生きる力、活かす力～

### 新会員名簿

敬称略

#### A 会員

( ) 内単位：千円

Michael Broadcast 合同会社

#### 寄 付 者

|                         |           |            |           |
|-------------------------|-----------|------------|-----------|
| 吉田 弘行・公美子(3)            | 村中 武子(5)  | 的場 孝子(3)   | 日下 喬史(3)  |
| 柳下 徳子(3) Hanus Hans(21) | 古川 誠二(3)  | 野田 千恵子(20) | 伊藤実希子(10) |
| 本田まゆみ(10) 高橋喜久子(10)     | 西 勝(10)   | 川戸 まり(10)  | 山下 清美(10) |
| 押川 春美(10) 海江田紀子(10)     | 田中 俊子(10) | 末木 宏昌(10)  | 西山 悦子(30) |
| 藤根美智子(10) W・キップス(30)    | 研修参加者(1)  | 副島 勲(3)    | 中野 知美(13) |
| 加藤 迪春(30) 伊藤登茂子(10)     | 研修参加者(13) |            |           |

※ 2011年1月15日現在 27名

ありがとうございました!

### ～～ 編集後記 ～～

本誌は今号が第50号となり、一つのマイルストーンに達したということで、創刊号から50号までの歴史を振り返る記事を書いてみました。私も今まで第30号以前の本誌を読んだことがなかったので、今回その機会を得て通読してみると、如何に先輩諸氏が本誌の発行に苦勞されたかが読み取れる気がしました。今やスピリチュアルケアの啓発や広報に本誌の持つ使命は大きいと感じます。それを強く自覚して編集委員会も努力していかねばならないと考えています。しかしながら、限られた数の編集委員からのアイデアも枯渇しつつあります。読者の方々にはここでも何回かお願いしていますが、本誌の内容に関するコメントや要望を是非お寄せ下さるようお願いいたします。

本誌「スピリチュアルケア」の発行費用の一部は  
中外製薬株式会社からのご寄付によるものです。